

芥川龍之介『羅生門』 末尾改稿に対する一考察

東洋高等学校 高藤 大空

【はじめに】

大正七年刊『羅生門』の末尾「下人の行方は、誰も知らない。」については、これまでさまざまな考察がなされており、考察をまとめた研究までもがある状態である。本稿は先哲に敬意を表しつつもそれらの詳述を避け、末尾改稿に対して考察をするものである。

【問題点の確認Ⅰ】

『羅生門』の末尾は三回改稿が行われている。

- ①「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあつた。」(大正四年)
- ②「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでゐた。」(大正六年)
- ③「下人の行方は、誰も知らない。」(大正七年)

①が『帝國文學』に発表された初出の文章であり、②が短編集『羅生門』(阿蘭陀書房)に掲載されたもの、そして③が『鼻』(春陽堂)に掲載された、「最終稿」とも言えるものである。

改稿には必ず作者の意図がある。高校の授業ではこの改稿の出来事を説明し、「下人はこの

後どうなったのか」という問いかけや、「どのような意図でこのように改稿したのか」という問いかけがよく行われる。前者の問いかけは生徒の自由な発想を促すことが主な目的であり、証拠を提示しての確たる答えは無い。後者の問いかけに対しては、前述したように膨大な量の研究があり、「エゴイズム」「善悪」「闇」「境界」「決意」といったキーワードの全てを集約して教員が説明することは授業時間の制約があることから至難の業であろうと考えられる。ここではそうした現状を踏まえた上で、あえて問題として提示する。

「どのような意図で改稿したのか」

【問題点の確認Ⅱ】

作者の末尾改稿の意図を推し量る上で考えなければならぬ問題が一つある。所謂「老婆の論理」と呼ばれる、老婆が髪を抜いていた女のことを語った直後の、

「老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。」という部分である。直接の言葉の意味する鉤括弧があるにもかかわらず、「だいたい」

「こんな」「意味のこと」という言い方をしているのはなぜか。この部分は三度も改稿する機会があったのに手を加えられていない。また、老婆のこの発言は、下人がにきびから手を離し、引剥になるという宣言の引き金となる重要な言葉である。なぜこのように迂遠な言い方にしたのだろうか。

「老婆の台詞の後の遠まわしな言い方にはどんな意図があるのか」

まずはこの問題への接近を試みる。

【解決のための接近方法〈老婆の台詞〉】

『羅生門』において『今昔物語集』巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語」及び同書巻三十一第三十一話「大刀帯陣売魚姫語」の使用(引用、原典としての認識)が認められることに異論を挟む者はいまい。そこで、『羅生門』における発言と『今昔物語集』の先の二作品における発言に注目して、

「老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。」の意図について探ってみたい。

まず、『羅生門』から全発言を抜粋する。(番号、傍線稿者)

①「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手を塞いで、こう罵った。

②「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色を、その目の前へ突きつけた。けれども老婆は黙っている。

③そこで、下人は、老婆を、見下ろしながら、少し声を和らげてこう言った。

「おれは検非違使の斥の役人などではない。

今しがたこの門の下を通りかかった旅の者だ。だからおまえに縄をかけて、どうしようというようなことはない。ただ、今時分、この門の上で、何をしていたのだから、それをおれに話ささえすればいいのだ。」

④その時、その喉から、からすの鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝わってきた。「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。

⑤老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、臺のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

「(前略) わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。(後略)」

老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。⑥「きつと、そうか。」

老婆の話が終わると、下人は嘲るような声で念を押しした。

⑦そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

「では、おれが引剥をしようと恨むまいな。おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」

続いて、『今昔物語集』の先の二作品における全発言を引用する。(カナ、漢字表記は改めた。)

「羅城門登上層見死人盗人語」

⑧おどして試みむと思ひて、やはら戸を開けて刀を抜きて、「おのれは、おのれは」と言ひて、走りよりければ、

⑨盗人、「こは何ぞの姫の、かくはし居たるぞ」と問ひければ、

⑩姫、「おのれが主にておはしましたる人の失せ給へるを、あつかふ人のなければ、かくて置き奉りたるなり。その御髪の長に余りて長ければ、それを抜き取りて髪にせむとて抜くなり。助け給へ」と言ひければ、

「大刀帯陣売魚姫語」

⑪怪しがりて引き奪ひて見れば、蛇を四寸ばかりに切りつつ入れたなり。あさましく思ひて、「此は何の料ぞ」と問へども、

①、②、③は⑧、⑨と対応していると考えられ、④は⑩と対応していると考えられる。⑥、⑦に対応する箇所が無いのは⑤から「大刀帯陣売魚姫語」の話が入り、「大刀帯陣売魚姫語」の内容を受けての発言だからと考えられる。

ここで改めて見るべきは⑤の表記の仕方である。原典との対応が見られる①、②、③、④にしても、⑤の内容から引き継がれる⑥、⑦にしても、発言前後の表記に問題は無い(稿者傍線参照)。一方、⑤は括弧での発言が直後にあるにもかかわらず「こんなことを言った」で始まる。「こんな」は「このような」が約³まった言葉であり、「話し手がすでに発言した事柄などを、それと同様だと考えられる事柄をも含めて、話し手自身の判断に基づいて、例示的に指し示すことを表す。(『新明解国語辞典 第六版』)(傍点稿者)という意味である。そして⑤の発言の後にはさらに手が込んでいる。「だいたい」(『細かな所は除いた、主要な部分』『新明解国語辞典 第六版』)、「こんな」(前述)、そして「意味のこと」である。通常我々が「こんなことを言った」や「だいたいこんな意味のことを言った」を使う場合は、空間的、時間的な隔たりのある場合か、話者の発言を(主観に基づい

て) 要約して伝える場合か、あるいはその両方の場合がある。ここではそうした予備情報が一切無い。

【可能性の検証】

こうした情報を踏まえ、考えられる可能性を検証していく。

i 「口ごもりながら」という記述が直前にあるため

↓④の発言の直前にも、聞きづらさを匂わせる「あえぎあえぎ」という記述があるので理由にはならない。

ii ここだけ違う原典を採用しているため

↓⑥、⑦も「羅城門登上層見死人盗人語」には無い発言であるにもかかわらず発言表記上の問題は無いため、理由にはならない。

iii ⑤の引用元が発言ではないため

↓「大刀帯陣売魚傭語」での発言は⑩だけであり、理由として考えることはできる。

こう見るとiiiの可能性が高いように思われる。もともと、iiと同様の理由からiiiの可能性を潰すこともできるかもしれないが、「大刀帯陣売魚傭語」の発言では無い箇所を発言に変えたという点は考えて然るべきであろう。

ここで実際に「大刀帯陣売魚傭語」を確認したい。本文が長いので⑤に相当すると思われる箇所以外は要約するが、

昔、大刀帯の陣に魚を売る女がおり、大刀帯ども、これを買はせて食ふに、味ひのうまかり

ければ、これを役ともてなして采料に好みけり。ある時、大刀帯たちが北野で鷹狩をしていると、なぜか野に件の魚売りの女がいる。一体こんなところで何をしているのだろうと不思議に思った大刀帯たちは、女の持っていたざるを奪い取り、中を覗いた。中には四寸ほどに切った蛇が入っており、大刀帯たちは「此は何の料ぞ」と問い質すも、女は答えない。早う此奴のしけるやうは、楚を以て藪を驚かしつつ、這ひ出づる蛇を打ち殺して切りつつ、家に持ち行きて塩をつけて干して売りけるなりけり。

(傍線稿者、カナ、漢字表記は改めた。)

本文はこの後、よく分からないものは食べるべきではない、という教訓で結ばれている。前述したように本文中の発言は⑩だけであり、⑤に相当すると思われる傍線部は地の文である。それも傍線の二箇所をまとめた形で⑤は記されており、やはりiiiの可能性は高いと考えられる。

【検証結果】

以上を踏まえ、

「老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。」の意図を、「引用元が発言では無かったが故の記載」とし、ここからさらに推し進めて、

(⑤を、「大刀帯陣売魚傭語」での内容をまとめた、あるいは要約したもの、という観点から言い換えるならば)「どこまでも引用元に忠実であろうとする姿勢」と捉えたい。この姿勢はそ

のまま『今昔物語集』に収録された作品を正確

に使用とする姿勢と言いつ換えることができるだろう。この結果に基づいて、そもその問題である、「末尾の改稿意図」に切り込んでいきたい。

【解決のための接近方法(末尾の改稿意図)】

冒頭でも述べたが、末尾部分の改稿意図については先哲たちの膨大な量の研究がある。それらの多くが「下人が最後に奪っていったもの」に注目している。これは、先ほどから引用している原典『今昔物語集』『羅城門登上層見死人盗人語』と、明確に異なるからである。簡単に説明すると、

『今昔物語集』『羅城門登上層見死人盗人語』では、「死人の着たる衣」と「傭の着たる衣」、「抜きとりてある髪」を奪っていく。これに対して『羅生門』では、「老婆の着物」しか奪わない。原典では奪えるものを全て掠奪しているのに、「引剥」になることを宣言した下人は死人の衣、髪を奪わない。これが「奪わない」なのか「奪えない」なのかも問題なのだが、概ねこの差異に注目して末尾への解答を紡いでいる。先行研究での微に入り細に入った考察は驚嘆に値するが、微視的に過ぎる感拭えない。今回は視野を拡げ、全体の流れにおける位置を確認することで、「老婆の着物」だけを奪ったのはなぜなのか、ひいては文末の改稿にはどのような意図があるのか、を考えていく。

「老婆の着物」だけを奪うまでの過程

A 下人は、手段を選ばないということ肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来るべき「盗人になるより外にしかたがない。」ということとを、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

B むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、飢え死にをするか盗人になるかという問題を、改めて持ち出したら、おそらく下人は、なんの未練もなく、飢え死にを選んだことであろう。

C しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさつきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、飢え死にをするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時の、この男の心持ちから言えば、飢え死になどということとは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。

Aは下人が羅生門の下で悩んでいる場面、Bは老婆を見つけた時の場面、そしてCは老婆の発

言を聞いた時の場面である。このCの場面を経て、下人は「引剥」の宣言をし、老婆の着物を奪う。この流れは一見すると

A 悩む(決められない)

B 飢え死に(悪に対する反感)「憎悪」

C 盗人(Aでの「欠けていた勇氣」)

という、決断までの過程であるように見えるが、【問題点の確認Ⅱ】でも取り上げたように、意志決定の決め手とも言える老婆の発言(⑤)が圧縮されており、明確ではないことを考えると、「決断」と判断するのはいささか急であると言わざるを得ない。むしろこの流れは、どちらに進むか決められない下人が、老婆の様子を見て、すぐさま悪を憎むようになり、同様に老婆の発言を聞き、すぐさま引剥の宣言をする、と捉えた方が自然ではないだろうか。そう考えると、

「老婆の着物だけを奪う下人」の記述にも納得できる。つまり、深く考えることなく目の前の出来事に対して衝動的に行動を決定する下人であるからこそ、「盗人」としては不完全な(あるいは盗人失格とも言える)「老婆の着物だけを奪う」という行為に帰結するのである。この考え方は当然末尾にも反映されている。「京都の町へ強盗を働きに急ぎつ、あつた。」という初稿は、下人が老婆の発言を聞くことによつて「盗人」になる決意を明確にし、以降も盗人で

あることを匂わせる記述であるのに対し、最終稿の「誰も知らない」は「分かり得ない」つまり、目の前の出来事に対して衝動的に行動を決定する下人であるからこそ、この後盗人になるのか、飢え死にするのか、それとも別の選択肢を選ぶのか、それさえも判然としない。という意味になるのである。下人の行動心理を限界まで突き詰めたからこそその変更であると言える。

【まとめ】

「だいたいこんな意味のことを言った」の検証、先のA↓B↓Cから読み取れる下人の心理、そしてそこから導き出される末尾改稿の意図、これらをまとめると、最後にもう一つ、末尾改稿の意図が見えてくる。それは、『今昔物語集』の構造の踏襲である。

「羅城門登上層見死人盗人語」は「今は昔、撰津の国の辺りより盗みせむがために」で男が登場し、盗人として話が終わる。「羅生門」は「飢え死に」も「盗人」も選べない下人で始まり、どちらにも片寄らない下人で終わる。一貫性を持った『今昔物語集』と、一貫性の無い一貫性を持たせた『羅生門』、作者はどこまでも『今昔物語集』を意識していたと考えられる。

参考文献

・芥川龍之介全集 第一巻

一九七七年七月刊 岩波書店

・今昔物語集 五(日本古典文学大系26)

一九六三年三月刊 岩波書店